結ぶやかたをの鷹もましろに雪は降りつつ」（新拾遺）にみるように、雪と取り合わせて歌われることが多いのも、萬葉集での「真白」が雪と鷹に対してのみ用いられていることと関係しているのかもしれない。なお、和歌における「ましろのたか」以外の「真白（ましろ）」の用例は過小であり、「真青（まさを）」「真黒（まくろ）」「真赤（まか）」となると皆無である。これに対し、散文の説話を中心にこれらの表現が散見される。つまり「真＋色彩語」は、散文の口頭表現的な文脈で用いられるようになっている。「ましろ」が、歌語として定着していかなかった理由とともに今後考察していかねばならない問題である。

（13）この「時じ」について、諸注の訳は「その時節ではなく」（＝全註釋・注釋）・「冬ではなく」（＝『窪田評釋』）、「時ならず」（＝全集・新大系・新全集）、「つねに・いつも」（＝大系・全注・釋注・和歌大系）となっている。結局のところ、「雪の時節ではなく」とする立場と、「つねに」とする立場で分かれている。前者は「神の威力を云はうとしたものだからである。」（『窪田評釋』）ことを、後者は「富士山の雪は一年中降り積もっている」（『全注』）ことをそれぞれ根拠としている。赤人が天武御製歌（本文用例25）の「時なくそ雪は降りける」を踏襲せず、「時じくそ雪は降りける」と表現しているのは、「時なし」では表せない「時じく」特有の意味、すなわち「その時節ではない」意を打ち出す意図があったからではないかと忖度される。「天地の分かれし時ゆ　神さびて高く貴き」と富士の神性を冒頭から歌うこの作品のあり方と相まって『窪田評釈』説が支持される。

（14）梶川信行「《富士山》の誕生―山部赤人の「望不尽山歌」論のために―」（『近畿大学教養部研究紀要25巻2号』一九九三年十二月）に、鎌倉時代以来、富士山を美的な対象として眺める視点が成熟してきた旨の指摘があり、参考となる。

（うえの　みほこ・准教授）

傍線部分「雪じもの」の表記が、「白雪」になっているのは、漢籍の用例に直接学んだ痕跡として注目される。その後、萬葉集の表現「しらゆき」として用いられる際に、積雪に象徴的な「面としての白さ」をいう和歌表現として発達したのではないかと忖度される。

(9) 前期萬葉では「大雪降れり」(②一〇三)や「大雪の乱れて来たれ」(②一九九)にみるように、「大雪」という名詞によって「積雪」を暗示する表現がある程度である。

(10) 漢籍における「真白」は『藝文類聚』に、「大秦國出明珠夜光珠眞白珠」・「周庾信詠園花詩曰　～花雜映河陽　自紅無暇染　真白不須粧」と二例確認できる。いずれも「珠」と「花」に対してその白さを「ほんとうに」「まことに」と強調する用法である。

(11) 三巻本では「降るものは、雪。霰。霙(みぞれ)は憎けれど、白き雪のまじりて降る、をかし。」(『新全集』)となっていることや、漢籍とは無関係に清少納言独自の発想から生み出された可能性もあり、当該箇所が直接に漢籍と影響関係にあるかは不明である。

(12) 萬葉集の「ま白」は他に、家持作品「詠白鷹歌」の長反歌作品の反歌に「矢形尾(やかたを)の真白(ましろ)の鷹をやどに据(す)ゑかき撫(な)で見つつ飼くし良しも」(⑲四一五五)があるのみである。家持の接頭語「ま」の用い方をみると赤人の「ま」の用語を踏襲している形跡がある。赤人の接頭語「ま～」は、「真白」・「真熊野」・「真梶」の三種類確認できるが、このうち「真梶」は人麻呂作品に既出である。残る「真熊野」と「真白」を用いているのは家持のみである(万葉集の「ま+名詞［形容詞・副詞］」の人麻呂・赤人・家持の使用状況は以下の通り。人麻呂＝「真弓」「真梶」「真木」「真神」「真玉」「真砂」「真草」「真日」「まそ鏡」「真こと」「真幸く」「真うら悲し」／赤人＝「真白」・「真熊野」・「真梶」／家持＝「真熊野」・「真野」・「真砂」・「真白斑」・「真白」・「真子」・「真梶」・「真袖」・「真鹿子矢」・「まそ鏡」・「真こと」・「真幸く」)。家持は、雪のように純粋な白を有する鷹として歌うことで、越中での無聊を慰めていたのだろうか(家持の「真白の鷹」の背景にも『文選』班固東都賦「白雉詩」の白雉の羽の白さを純白の白と称える発想が影響している可能性もある)。家持の「真白の鷹」は平安時代の和歌においても多くの用例をみる。平安時代から鎌倉時代の「真白の鷹」が、「ゆきふかきうだののみつのくさがれにましろのたかをあはせてぞゆく」(江帥集)・「みしまのやくるれば

れている教科書指導書での「積雪」訳は、『中学3』では学校図書・三省堂、『国語総合』では明治書院・筑摩書房・数研出版・大修館である。「降雪」訳は、『中学3』では光村図書、『国語総合』では東京書籍のみであり、教科書の大半が「積雪」として解説している。

（4）「なまよみの　甲斐の国　うち寄する　駿河の国と　こちごちの　国のみ中ゆ　出で立てる　富士の高嶺は　天雲も　い行きはばかり　飛ぶ鳥も　飛びも上らず　燃ゆる火を　雪もて消ち　降る雪を　火もて消ちつつ　言ひも得ず　名付けも知らず　奇しくも　います神かも　石花の海と　名付けてあるも　その山の　堤める海そ　富士川と　人の渡るも　その山の　水の激ちそ　日本の　大和の国の　鎮めとも　います神かも　宝とも　なれる山かも　駿河なる　富士の高嶺は　見れど飽かぬかも」（虫麻呂　③三一九）

「富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」（虫麻呂　③三一〇　反歌）

「富士の嶺を高み恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを」（虫麻呂　③三一一　反歌）

（5）『続日本紀』天応元年（七八一）七月条に「富士山下雨灰」とあるのをはじめ、噴火の記録が散見できる。萬葉集にも「我妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ」（⑪二六九五）など恋心に喩える歌が三例確認できる。また東歌では、「天の原富士の柴山この暗の時ゆつりなば逢はずかもあらむ」（⑭三三五五）のように生活に密着した山として詠まれている。

（6）特に本居宣長は雪の「真白」を多用しており、『鈴屋集』（一七九八年頃）に「真白にぞ雪ふりおけるみよし野のみみがのたけはいまだ冬かも」（二〇六五）・「うめ咲きて春と思ふにけさ見れば庭もましろにあわ雪ふれり」（一六三五）などの作品をみる。

（7）指導書では、光村図書の『中学国語3』に「『真白にそ』には聖なるものの中に美を発見した一瞬が表現されている」、筑摩書房の『国語総合』に「『ま白にそ』→『白妙の』、『雪は降りける』→『雪は降りつつ』となることで、万葉集歌にあった率直な感動は影をひそめて、繊細・優美ではあるが、実感と迫力に乏しい詠みぶりになっている」の記述をみる程度である。

（8）人麻呂の「獻新田部皇子歌」（③二六一）に「やすみしし我が大君～ひさかたの天伝ひ来る雪じもの　行き通ひつつ～」があり、

「積雪」に焦点を当てて歌ってはいない。神秘性を体現する極上の白い雪が眼前に現象していること、つまり「降雪」を表現している。「時じく」「ま白」といった神秘的な降り方に主眼を置く歌い方と、多層的な雪の空間表出に重点を置く歌い方と、それぞれが目指している世界観の異質性を萬葉集と新古今集・百人一首の富士山歌に看取することができる。

従来、萬葉集と新古今集・百人一首の「田子の浦」の歌は、特に教科書を中心にいずれも「積雪」の文学作品として理解されてきたが、叙上のごとき違いがあることを確認した。

（注）

（1）引用本文は以下の通りである。萬葉集・駿河國風土記逸文・伊勢物語・東関紀行・海道記・覧富士記は新編日本古典文学全集（小学館）、古今集・後撰集・拾遺集・金葉集三奏本・新古今集・貫之集・和歌初学抄・五代集歌枕・定家物語・宇津保物語・顕輔集・道命阿闍梨集・下野集・長秋詠藻・新拾遺和歌集・草庵和歌集・鈴屋集は新編国歌大観（角川書店）、枕草子は枕草子［能因本］（笠間書院）、歐陽脩文忠公文集は商務印書館、世説新語は四部叢刊本および新釈漢文大系（明治書院）、玉台新詠は玉臺新詠箋注（中華書局）、文選は新釈漢文大系（明治書院）、藝文類聚は中華書局影宋刊本、鮑參軍詩は鮑參軍詩集（白帝社）、篆隷萬象名義は台聯國風出版社、集韻は上海中華書局據楝亭五種本校刊本に基づく。以上の文献からの引用本文に付されている傍線はすべて上野による。

（2）『全注』『釋注』では「降り積もっている」と訳出している。『全注』では「『雪が降ッタ』と言っても、この場合は、結果態の『積っている』ことの表現」とする。なお、「ける」については、諸注いずれも現実の事実や気づきであるとしている。

（3）「積雪」訳の中でも、『金子評釋』では、「雪が今降るのではない、降ってあるのをかくいふ」と「降雪」を否定している。「降雪」訳の『鴻巣全釋』では「雪の眞白に降つてゐる状態を讃美したのである」とある。『中学国語3』と『高校国語総合』で使用さ

「白たへの富士の高嶺」だったと判断される。

五　結

萬葉集における赤人の時代の表現環境として、漢籍を背景に「白雪」や「降り積む」「降り置く」など多様な「積雪」表現の可能性が広がっていた。虫麻呂も富士山歌で「降雪」と「積雪」表現を長反歌で使い分けている。これに対し、赤人富士山歌は長反歌ともに「雪は降りける」と同一表現で統一しており、今現在降っている雪を歌うことに焦点を当てている。これは、富士の神性を構築するための赤人の意図的な歌い方であったと考えられる。「日の影」「月の光」「白雲」の三連対による富士の偉容を表現しつつ、そこに「時じく」降る雪が「ま白」であることへと帰結させる歌い方には、やはり漢籍の発想に基づく赤人の創意があった。様々な素材の白の中でも最上級の白であることを讃美する漢籍の発想に基づいて、長歌の〈日の光〉〈月光〉〈白雲〉の「白」よりも白い究極の白を有して降る反歌の「降雪」表現を創出した。長反歌一体の中で初めて意味をもった赤人富士山歌の「ま白」は、平安時代の長歌の衰退を背景にその一回的な宿命を背負って、平安時代後期には「白たへの富士の高嶺」へと姿を変えていく。その過程には、萬葉集の「白たへに」の展開や平安時代前期から中期にかけての「白たへ」に下接する語句の多様化といった「白たへ」をめぐる和歌文学が切り拓いてきた「積雪」表現の歴史と、それを支える平安時代後期の富士山の文化的事情（＝紀行文日記にみる「白たえのような雪を冠する富士の高嶺」というイメージの共有化）があった。

新古今集や百人一首の富士山歌は「積雪」の上に降り続ける富士山の「降雪」の姿を表現している。絵に描かれる典型的な「白たへの雪」を冠する富士山に想像上の雪が降り続いている情景である。「積雪」の上に降り続ける雪という、いわば「雪の重層性」を歌うところに、この歌の面白みがある。これに対し、萬葉集の赤人富士山歌は、

平安時代後期の『更級日記』や一二〇〇年頃には成立していた新古今和歌集と同じ鎌倉時代中期の『東関紀行』（一二四二年頃）および『海道記』（一二二三年頃）には、いずれも頂に白雪を冠する富士が歌われている。特に注目されるのは、『東関紀行』の以下の記述である。

（54）田子の浦にうち出でて、富士の高嶺を見れば、時分かぬ雪なれども、なべていまだ白妙にはあらず、青うして天によれり。姿、絵の山よりもこよなう見ゆる。

「絵の山」と比較した上での、実際の富士山を「なべていまだ白妙にはあらず」と表現している。言い換えれば、絵に描かれた富士山は「白たへ」の雪を冠する富士山だということである。これに対し、平安時代前期の『伊勢物語』「東下り」では「富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり。時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ」と、「白たへの富士の高嶺」ではなく「鹿の子まだら」と表現しており、「白たへの富士の高嶺」という認識は共有化されていなかった可能性が高い。つまり、平安時代後期以降、「白たえのような雪を冠する富士の高嶺」というイメージの共有化がなされていったのだとわかる。(注14)

以上のことをまとめると、以下のようになる。即ち、まず、布の素材を表す「白たへの」とは異なる、白い布の面としての状態やその光沢を表す形象化表現「白たへに」が萬葉後期あたりから用いられるようになった。それを受けて平安時代前期から中期には、積もる雪を月光に喩えることで面としての白が放つ輝きを表現する「白たへに」による新たな「積雪」表現も生まれた。と同時にこの時期は「白たへの」に下接する語句の多様化も進んだ。いずれも「白たへ」の有する面としての白さや形状・光沢などを美的に形象化するものであり、このような展開のもと、平安時代中期以降、「白たへの雪」という積雪を美的に形容する表現が定着していくようになる。それと軌を一にするかのように、紀行文日記に書かれている「白たえのような雪を冠する富士の高嶺」というイメージの共有化がなされていく。つまり和歌表現における「白たへ」の展開と富士山の文化的背景の交錯するところに登場したのが

このような「白たへの雪」が定着していくなかで、「白たへの＋地名」の用例も散見されるようになる。

（47）むらさきの庭の雪には猶しかじみな白妙のみ吉野の山（長秋詠藻　五六三　藤原俊成）

右の（47）は、「白たへの」が積雪として山名に係る用例であり、宮中の庭の雪を称えるために、吉野の山に積もる雪を引き合いに出している。どれほど素晴らしい吉野の山の積雪であっても宮中の雪にはかなわないと歌う。しかし、「白たへの」が地名を下接する例は、右の一例を除きすべて「白たへの富士の高嶺」であり、他の地名は確認できない。鎌倉時代になると、左掲用例傍線部にみるように、「白たへの」に下接する地名は「富士の高嶺」のみとなる。

（48）しろたへのふじのたかねにゆきふればこほらでさゆるたごのうらなみ（千五百番歌合　二〇五四）

（49）白妙の富士の高ねに月さえて氷をしけるうきしまが原（新拾遺和歌集　⑤四三一）

（50）白妙の富士の高根の秋の月影も千里の雪とみえつつ（草庵和歌集　④五一三）

つまり、実質的には「白たへの」は「富士の高嶺」にのみかかる用例として定着しているといえる。室町時代中期の紀行文日記『覧富士記』では、陰暦九月十八日の記述に「白妙の高嶺ばかりはさだかにて日影残れる山の端もなし」と、「白たへの高嶺」という表現も登場するようになる。そして、このような「白たへの富士の高嶺」という表現の定着の背景には、平安時代後期以降の紀行文日記における富士の「積雪」描写を考慮しておく必要があるだろう。

（51）さまことなる山の姿の、紺青（こんじょう）を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色濃き衣に、白き袒着（あこめ）たらむやうに見えて、山のいただきの少し平（たひら）ぎたるより、煙（けぶり）は立ち上（のぼ）る。（『更級日記』）

（52）幾年（いくとせ）の雪のつもりてか富士の山いただき白きたかねなるらむ（『海道記』　四月十四日条）

（53）旅衣（たびころも）すそ野の庵（いほ）のさむしろに積もるもしるき富士の白雪（『東関紀行』）

大系　後撰集』）とあるように、庭に降り積もる雪を月光に見たてている。この作品は拾遺集（④二四六）や貫之集にも小異で収録され、その詞書から、屏風歌であり、想像上の作品であることがわかる。萬葉集の用法を受けて更に「白たへ」の美的形象化が進んでいることがわかる。

と同時に、平安時代以降、「白たへの」が下接する語句が多様化している点にも注目される。

（40）　けふもまた後もわすれじ白妙の卯花さける宿とみつれば（貫之集　一四七）

（41）　君が代の年のかずをば白妙の浜の真砂とたれかいひけん（貫之集　一六五）

右掲（40）（41）のように、「卯花」や「真砂」を下接する表現が見られるのをはじめ、「白妙の浪」（古今集⑰九一一）・「白妙のしろき月」（拾遺集⑨五一八）・「白妙の梅」（和泉式部集三三三）と多様化している。しかし、貫之関係歌や同時代の歌人の作品には「白たへの雪」はまだ確認できない。つまり古今和歌集の時代にはまだこの表現は定着していなかった可能性が高い。平安時代の勅撰集における「白たへの雪」の初見は金葉和歌集であり、私家集の状況を見ても、平安中期以降に定着していった用法と考えられる。

（42）　しろたへの雪まかきわけ袖ひちてつめるわかなはひとりくへとや（宇津保物語　十四巻　くらひきの中）

（43）　あさまだきふりさけみればしろたへのゆきつもれるやたかみやのさと（顕輔集　一三三）

（44）　しろたへのゆきふりつむとみえつるはやまのさくらのちるにぞありける（道命阿闍梨集　一九一）

（45）　しろたへのゆきを月とぞまがふめるともなるこよひなににたとへむ（四条宮下野集　二五）

（46）　しろたへの雪ふりやまぬむめがえにいまぞうぐひすはるとなくなる（金葉和歌集三奏本　①一六　平兼盛）

右の（42）（43）（44）では、波線部分「かきわけ」「つもれる」「ふりつむ」より、白たえの雪が積雪であることがわかる。（45）の例は、積雪の放つ光を月光に喩えるものである。（46）の「ふりやまぬ」も激しく降る様が、布の面のように見えることを表現する。いずれも白い布のような面積を有する雪の意で表現されている。

共起しておらず、この点で「白たへ」との質差がある。「積雪」の面としての白さを強調する「白雪」とは異なり、「にほふ」を導く「白たへ」は白い衣のような形状や光沢を有するものとして認識されていると理解される。

人麻呂関係歌の挽歌では「白たへ」は「白たへの麻衣」（②一九九）・「白たへの天領巾」（②二二〇）、志貴皇子挽歌でも「白たへの衣」（②二三〇）といずれも「白たへの＋衣」である。しかし、家持と巻十三の例では「白たへに＋よそふ（取り着る・飾り奉る）」となっている点に注意される（用例35～37）。状態を表す助詞「に」を下接する「白たへに」装うとは、白たへの状態に身を包むことをいう。衣服の素材として「白たへの衣」と表現するのではなく、白い布の状態を喚起する表現にすることで、伺候する多くの舎人達が、一瞬にして一斉に白い布のようになったと形象化し、皇子の死の悲嘆へと急展開をもたらす役割を果たしている。

また、（38）のように、山にかかる雲を死者に喩える例は「直（ただ）に逢はば逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲（しの）はむ」（②二二五　依羅娘子）・「昨日（きのふ）こそ君はありしか思はぬに浜松の上（うへ）に雲にたなびく」（③四四四　大伴三中）と集中散見されるが、それを「しろたへに」によって表現している例は他にない。（38）は、「白たへに」と美的に象徴することで、皇子への敬意を表していると理解される。

つまり、萬葉集の「白たへに」によって、白い布のような状態を比喩的・象徴的に表す用法が新たに展開しているのだと判断される。素材としての「白たへ」から、白い布の「面」としての状態、あるいは光沢を放つ白布のイメージを付与する用法へと広がってきていることが「白たへに」の用例から理解できる。

このような萬葉集の状況を受けて、平安時代前期から中期には、積もる雪を月光に喩えることで、面としての白が放つ輝きを表現する「白たへに」の新たな「積雪」表現も生まれている。

（39）　よるならば月とぞみましわがやどの庭白妙にふりつもる雪（後撰集　⑧四九六　貫之）

右掲（39）は、「夜であれば月の光だと思って見るだろう。我が家の庭を真っ白にして降り積もっている雪は」（『新

に雪は降り置きて　古ゆ　あり来にければ　～（⑰四〇〇三　敬和立山賦　大伴池主）

（32）梅が枝に鳴きて移ろふうぐひすの羽白たへに沫雪そ降る（⑩一八四〇　作者未詳）

（33）白たへににほふ真土の山川に我が馬なづむ家恋ふらしも（⑦一一九二　作者未詳）

（34）馬並めて高の山辺を白たへににほはしたるは梅の花かも（⑩一八五九　作者未詳）

（35）かけまくも　あやに恐し　言はまくも　ゆゆしきかも　我が大君　皇子の尊　～いや日異に　栄ゆる時に　逆言の　狂言とかも　白たへに　舎人よそひて　～（③四七五　安積皇子挽歌　大伴家持）

（36）かけまくも　あやに恐し　我が大君　～五月蝿なす　騒く舎人は　白たへに衣取り着て　常なりし　笑まひ振舞い　や日異に　変はらふ見れば　悲しきろかも（③四七八　安積皇子挽歌　大伴家持）

（37）かけまくも　あやに恐し　藤原の　都しみみに　人はしも　満ちてあれども　君はしも　多くいませど～大殿を　振り放け見れば　白たへに　飾り奉りて　うちひさす　宮の舎人も～（⑬三三二四　皇子挽歌　作者未詳）

（38）つのさはふ磐余の山に白たへにかかれる雲は皇子かも（⑬三三二五　皇子挽歌　作者未詳）

まず、雪に対して「白たへに降る」と表現しているものは二例ある（右掲31・32）。（31）では、「降り置く」とあることから積雪の様を「白たへ」と表現していることがわかる。（32）は、「梅の枝を鳴いて移る鶯の羽根が、白い細布の如く見えるまで、春の消え易い雪がふる。」（『私注』）とあるように、鶯の羽に積もる雪を「白たへ」に喩えている。いずれも積雪の様が、「白たへの衣」のようであることを比喩的に表現している。

また、（33）・（34）は「しろたへにににほふ」という新しい表現として注目される（「にほふ」は、『時代別国語大辞典』に指摘されているように、元来、赤色系列の発色をいう）。（33）は「白い栲の布のように照り映える真土の山」（『釋注』）、（34）は「遠い山のほうを、その衣の色の白い色で美しくしている」『窪田評釈』）と解説されていることからもわかるように、白い布の照り映える様がこの表現として活かされている。前節でみた「白雪」は「にほふ」と

富士の神秘性であった。

四　「白たへの富士の高嶺」について

新古今集や小倉百人一首中に収められている富士山歌（用例3）第三句は、すでに平安後期の文献において「しろたへの」と訓まれていたことが次掲用例（28～30）から確認できる。第五句は「ふりつつ」と「ふりける」で分かれているものの、第一句～第四句の異同がなく（神田本・類聚古集・古葉略類聚鈔にシロタヘノとあるのと一致する）、すでに平安時代後期には「しろたへの」の訓が定着していたことがわかる。

（28）　たごの浦にうちいでてみればしろたへのふじのたかねにゆきはふりつつ（藤原清輔『和歌初学抄』第十二）

（29）　田子のうらにうち出でてみれば白妙のふじのたかねに雪ぞふりける（藤原範兼『五代集歌枕』巻上）

（30）　たごのうらにうちいでてみればしろたへのふじのたかねにゆきぞふりける（『定家物語』）

そこで平安後期以降、「白たへの～」が定着した背景にはなにがあるのか、萬葉集の「白たへ」にまで遡って考えてみることにする。萬葉集の「白たへ」の用法をみると、『時代別国語大辞典（上代編）』に「シロタヘで製した意で、袖・ころも手・衣・下衣・衣ノ袖・紐ノ緒・下紐・手襷（たすき）・帯などにかかる」とある通り、「白たへ＋の＋袖・衣・手本・衣手などの衣服に関する語句」が大半を占める（五十七例。「白たへの藤江」「白たへの羽」が各一例）。つまり、集中の「白たへの」の「の」が示す第一義的用法は、素材・属性としての「白たへの」である。

注目されるのは、「白たへ＋に＋用言」の用例（八例）である。作者判明歌では家持と池主作品にのみ確認でき、作者未詳歌の用例も後述するように萬葉前期には見られない歌われ方となっている。

（31）　朝日さし　そがひに見ゆる　神（かむ）ながら　み名に帯（お）ばせる～天（あま）そそり　高き立山　冬夏（ふゆなつ）と　別（わ）くこともなく　白たへ

そもそも、萬葉集において「雪は降りける」という表現自体、赤人富士山歌（冒頭掲載用例1・2）と天武天皇御製歌（次掲25）しかない。この歌は、雪歌の先例として後期萬葉人に熟知されていた作品である。

（25）　み吉野の耳我の嶺に時なくそ雪は降りける間無くそ雨は降りける　その雪の時なきがごと　その雨の間なきがごと隈もおちず思ひつつぞ来しその山道を（①二五　天武天皇）

右掲用例（25）の傍線部分は諸注いずれも「雪が降っていることだ」と「降雪」で解釈している。にもかかわらず、小稿冒頭で指摘したように、諸注の半数が赤人富士山歌の反歌（用例2）の「降りける」に関しては、「積雪」として解釈している。しかし平安時代前期の「降りける」も、次掲用例にみるようにいずれも「降っていることだ」と理解される用例である。

（26）　ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける（古今集　⑥三三一　貫之）

（27）　春近く成りぬる冬の大空は花をかねてぞ雪はふりける（一一二　貫之集）

右の（26）は「木々のあいだから花だと見るほどまでに雪が降ってくることだ」（『大系本』）とあるように、降雪を花びらの舞う様子に喩えている。（27）も第三句に「大空は」とあることから、大空からの「降雪」を花びらに喩えている。赤人富士山歌反歌の「降りける」も、まずは「降雪」として理解するのがこの表現のあり方に即している。赤人は「降雪」の結果態としての「積雪」の白さに焦点を当てて歌っているのではない。「積雪」の前段階の「降雪」の時点ですでに真白であることを歌うことで富士の非凡性を体現している。赤人の視線は、限りなく「天の原」に近いところにある。

「田子の浦ゆ」は、経過を表す助詞「ゆ」によって富士山を思いながら来た時間を表す。その対象に思いを至す姿は、天武天皇御製歌（先掲25）末尾の「思いつつぞ来し　その山道を」と重なる。富士山を思いながら「田子の浦」を通って視界の開けたところにうち出て見ると、そこで発見したのは降る雪の究極の白さであり、それに体現される

（『文選』司馬相如「子虚賦」）や「昼夜蔽日月、冬夏共霜雪」（謝霊運「登廬山絶頂望諸嶠詩」）などの山の高さを表現する漢籍受容がまずはあったと考えられる。しかし、それを引き受ける反歌（用例２）において、「ま白」と表現しているところに、赤人の別の創意があると言える。つまり、富士に「時じく」降る雪が最上級の白さを有することを導くためのもう一つの仕掛けを、先にみたような雪の「白」に関する漢籍の発想を背景に創出したのだと判断される。

赤人歌のように雪のみを対象とする「ま白」の用例が平安時代から鎌倉時代の和歌にはほぼ確認できない[注12]ということは言いかえれば、いかに赤人の「ま白」が萬葉集特有の用法の中で生み出されたのかを証明しているのではないだろうか。つまり、長歌を経てはじめて理解される一回的な「ま白」であるということである。長歌の衰退していく平安時代以降の和歌において赤人歌のような雪の「ま白」が見られない（歌語として定着しなかった）背景には右のような事情があると考える。

赤人長歌第七・八句の「天の原振り放け見れば」について、「天の原」を伴う「振り放け見れば」の集中例のほとんどが「星・月・天空など無限の空間を仰ぎ見る表現」であり、いわゆる「見れば型」の国見歌とは異なる「富士の神性と崇高さ、空間的な無限性をうち出した」ことが坂本信幸氏によって指摘されている（『セミナー　万葉の歌人と作品　第七巻』和泉書院）。その無限の空間を仰ぎ見る赤人の目に映ったものこそは、「日」「月」「雲」といった天象の「白」よりももっと白い雪の「時じく」[注13]降る姿だった。赤人が、虫麻呂のように「積雪」表現を用いず、長反歌一貫して「降りける」と同じ表現で統一しているのは、「『時じく』降る雪（＝長歌の雪）」を「究極の白さを有して降る雪（＝反歌の雪）」へと集約させていくことで、尋常ならざる富士の神性を歌いおさめるためだとまずは考えられる。次々と天から生ずる雪そのものが真白だと歌うことで、長歌の世界観（富士の神性）を補強し、確認している。

と三つの天象が歌われていることに注目される。「白雲」の「白」はいうまでもないが、「日」「月」も漢籍では「白」を表すものとして表現されている。例えば、「日」は、「淑貌耀皎日（＝淑貌は皎日に耀き）」（『玉台新詠』艶歌行）と、美人の顔が白く輝く日光に照らされていることを表現している。傍線部分の「皎」は、『篆隷萬象名義』の「皎」に「公鳥反月白也」と白いことを意味しており、萬葉集⑮三六六八の遣新羅使人歌の題詞にも「夜月之光皎々」と「皎」表記を確認することができる。また、月光は漢籍において雪の比喩表現として多用され、『玉台新詠』巻九「雑詩四首」に「隨庭雪以偕素（＝庭雪に隨つて以て偕に素く）」と、月光が庭の雪と白さを共にしている例をはじめ、歐陽脩の「雪」という詩（歐陽脩文忠公文集巻五四）の自注に「時在潁州作。玉月梨梅練白絮舞鵞鶴銀等事、皆請勿用（＝時に潁州に在りて作る。玉・月・梨・梅・練・絮・白・舞・鵞・鶴・銀等の事、皆用ひざるを請ふ。）」と、雪の描写に常用される語の使用を禁じる記述があることから、雪をイメージさせるものとして盛んに用いられていたことがわかる。

赤人は長歌において「白」を喚起する〈日の光〉〈月の光〉〈白雲〉を「見えない」と否定することで、何にも邪魔されない雪の純粋な「白」を浮かび上がらせることに成功したのではないか。いわば「日」「月」「雲」の「白」の否定から生まれて来る極上の「白」として捉えられたからこそ、反歌の「ま白」という表現が撰ばれたのではないかと忖度されるのである。高く貴い神聖な富士山を歌う虫麻呂歌でも長反歌で雪が歌われるものの、それが「白」なる雪へと導かれる歌い方になっていないのは、そもそも長歌において「白」が意識される歌い方になっていないことと関わるのではないだろうか（虫麻呂歌では「天雲もい行きはばかり」「飛ぶ鳥も飛びも上らず」と歌われている）。

無論、赤人富士山長歌の「渡る日の影も隠らひ　照る月の光も見えず　白雲もい行きはばかり」の三連対による富士の景描写には、高松寿夫氏が「〈不尽山〉の発見―赤人・虫麻呂をめぐって―」（『国文学研究』一〇三号一九九一年三月）で指摘されているように、「其山則盤紆弗鬱　隆崇峷崒　崟嵾差　日月蔽虧　交錯糾紛　上干青雲」

をかし。」（松尾聡・永井和子訳注『枕草子［能因本］』笠間書院）とある。能因本では「霙・霰・雪」それぞれの白さの中で、特に際立って「霰」「雪」が白いことを「真白」と表現している。留意されるのは、右掲用例で、同じ「白」の中での比較において際立つ白さを有するものに対し「真白」と表現している点である。この『枕草子』のように、同じ白の中でも際立っているという発想は漢籍に散見され、注目される。(注11)

D　皓鶴奪鮮　白鵰失素。　紈袖慙冶　玉顔掩姱。（『文選』　謝惠連　雪賦）

E　白珪誠自白　不如雪光妍。工隨物動氣　能逐勢方圓。　無妨玉顔媚　不奪素繒鮮。投心障古節　隱迹避榮年。
　　蘭焚石既斷　何用持芳堅。（『鮑参軍詩集』　巻第六　「詠白雪」）

右掲**D**「皓鶴（かうかく）も鮮やかなることを奪はれ、白鵰も素（しろ）きことを失ふ。紈袖（ぐわんしう）も冶しきに慙ぢ、玉顔も姱（かほよ）きを掩ふ。」とは、「雪の中では、白い鶴も鮮やかには見えず、白い鵰も白く見えない。白絹の衣も見栄えせず、玉の顔も美しさが隠れる」（新釈漢文大系『文選』解説参照）ということであり、ここでは、鶴・鵰・白絹・玉顔の白さと比べても雪の白さが一番であることを述べている。また用例**E**傍線部「白珪は誠に自ら白きも　雪光の妍（あで）やかなるに如かず」は、「白い宝石（白珪）も確かにそれなりに白いが、雪の美しさには及ばない」の意であり（鈴木敏雄『鮑参軍詩集』参照）、白い宝石よりも美しい白さを放つ雪を賛美している。

漢籍では雪以外でも、白の差異を表現する発想や究極の白を表現する発想が散見される。例えば『文選』班固東都賦「白雉詩」に「發皓羽兮奮翹英　容絜朗兮於純精（＝皓羽を發し、翹英を奮ひ、容は絜朗にして純精なり）」とあり、白い羽を広げ、白玉のように輝く羽で羽ばたきをすれば、その姿は清くけがれなく、純白の極みであるという。ここでは白雉の羽の白さを白玉の一種である玉英に喩えた上で、純粋な白（究極の白）であることを述べている。赤人歌の「ま白」も、このような発想から学ぶところがあった可能性はないのだろうか。

そのような視点から赤人富士山歌をみたとき、長歌（用例1）では対句形式で「渡る日の影」「照る月の光」「白雲」

と表現しているのをはじめ、『文選』謝惠連「雪賦」に「其為狀也、散漫交錯、氛氳蕭索。藹藹浮浮、瀌瀌奕奕。聯翩飛灑（＝其の狀爲るや、散漫交錯し、氛氳蕭索たり。藹藹浮浮として、瀌瀌奕奕たり。聯翩として飛び灑ぎ）」と、雪の降る様子を「散らばり、混じり合い、盛んになり、衰える。勢いよく降りつのり、絶え間なく飛び回り」（『新釈漢文大系　文選』参照）とするなど多様な表現を有する。萬葉前期に先述のような「積雪」表現が見られず、萬葉後期の「積雪」表現の使用者にも偏りがあるということは、漢籍での右のような「積雪」と「降雪」の使い分けに学んだ可能性が高いと判断される。

つまり、赤人の時代の表現環境として、多様な「積雪」表現の可能性が広がっていたわけであり、「積雪」「降雪」のいずれに焦点を当てて歌うのかが意識されるようになっていたと考えられる。事実、冒頭でも述べたように、虫麻呂の富士山歌では、長歌で「降る雪を火もち消ちつつ」と「降雪」を歌いつつ、反歌では「富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」と第一・二句で「積雪」を、第五句で「降雪」を表現し、意識的に歌い分けている。もし赤人富士山歌の「降りける」が、降り積もっていることを歌っているのであれば、萬葉後期の「積雪」表現のあり方から考えるに、「白雪ぞ富士の高嶺に降りつもりける」や「富士の高嶺に雪ぞ降り置く」などと表現されていてもよいところである。改めて、何故赤人は反歌において、「ま白にぞ～雪は降りける」と表現したのかが問われてくるのである。

三　「ま白」について

雪を「ま白」と表現している他例は萬葉集にはなく、また漢籍においても雪の白さを「ま白」と表現している作品は管見の限りでは確認できなかった。(注10) 平安時代の和歌においても同様である。ただし散文において、『枕草子』（能因本）の二二六段「降るものは」に「降るものは雪。にくけれど、みぞれの降るに、霰（あられ）、雪の真白（ましろ）にてまじりたる

(17) 富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり（③三一〇　高橋虫麻呂）
(18) 真木の上に降り置ける雪のしくしくも思ほゆるかもさ夜問へ我が背（⑧一六五九　他田廣津娘子）
(19) 尾の上に降り置ける雪し風のむたここに散るらし春にはあれども（⑩一八三八　作者未詳）
(20) 立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし（⑰四〇〇一　大伴家持）
(21) ～高き立山　冬夏と　別くこともなく　白たへに雪は降り置きて　古ゆあり来にければ～（⑰四〇〇三池主）
(22) 立山に降り置ける雪の常夏に消ずて渡るは神ながらとぞ（⑰四〇〇四　大伴池主）
(23) 梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ（⑩一八三三　作者未詳）
(24) 笹の葉にはだれ降り覆ひ消なばかも忘れむと言へばまして思ほゆ（⑩二三三七　作者未詳）

作者判明歌では、虫麻呂・家持・池主・他田廣津娘子のみであり、作者未詳歌では巻十に集中している。このような用例の偏りの背景には漢籍における「積」「満」「停」「棲」「揣」などによる「積雪」表現との関連性が考えられる。漢籍では後述のように「降雪」と「積雪」を使い分けて表現しており、「積雪」を美的対象として歌うこと自体、漢籍に学んだ可能性が高いと考えられる。例えば、右掲用例16の「（降り）積む」は、『文選』楽府下・陸士衡「苦寒行」の「積雪被長巒（＝積雪は長巒に被る）」や『文選』謝惠連「雪賦」の「徘徊委積（＝徘徊して委もり積もる）」、『文選』馬季長「長笛賦」の「冬雪揣封乎其枝（＝冬雪揣まりて其の枝を封ず）」などとの関係が考えられる。用例17～22の「降り置く」は、『文選』左太沖「招隠詩二首」に「弱葉棲霜雪（＝弱葉は霜雪を棲ましめ）」と竹柏の若葉がその上に霜雪をとどめ置くことを表現しているのが参考となる。用例23～24の「降り覆ふ」は、『玉台新詠』（近代呉歌九首　其四）「冬歌」の「素雪覆千里（＝素雪千里を覆ふ）」、『文選』「舞鶴賦」の「雪滿羣山（＝雪羣山に滿つ）」、『文選』潘岳「懐旧賦」の「夕雪暠以掩路（＝夕雪暠として以て路を掩ふ）」といった例が挙げられる。これに対して、漢籍の「降雪」表現は、『文選』楽府上・魏文帝「苦寒行」に「雪落何霏霏」と雪が激しく降る様子を「霏霏」

いずれも、「つもる」「ふみわけ」など積雪であることがわかる表現と共起している。これに対し、漢籍での「白雪」は、管見の限りでは「降雪」「積雪」に関係なく用いられている。

A　謝太傅 寒雪日内集　與兒女講論文義。俄而雪驟、公欣然曰　「①白雪紛紛何所似」兄子胡兒曰　「撒鹽空中差可擬。」兄女曰「未若②柳絮因風起。」公大笑樂（『世説新語』言語二）

B　「我所思兮在朔湄　欲往從之白雪霏」（張載「擬四愁詩四首」『玉台新詠』）

C　丘中有鳴琴。白雪停陰岡。丹葩曜陽林。（左太沖　招隠詩二首『文選』）

右掲**A**の傍線部①「白雪紛紛何所似（＝白雪の紛紛たるは何の似たる所ぞ）」とは、「白い雪の降りしきるさまは、いったい何に似ているだろうか」という問いかけであり、これに対し傍線部②で「柳絮因風起（＝柳絮風に因りて起こる）」と、柳絮が風で舞い散る様に似ていると述べており、「降雪」に対して「白雪」と表現している。**B**は、「我が思ふ所は朔湄に在り、往いて之に従はんと欲すれば白雪霏たり」と訓み、傍線部分の「霏」は「集韻」に「霏、零也」とあることからわかるように「降雪」を意味している。これらに対し、**C**の傍線部分「白雪は陰岡に停まり」では、白雪がまだ山の北側に積もっている状態（「積雪」）を表現している。

つまり、萬葉集では、漢籍の「白雪」をそのまま導入しているのではなく、「積雪」の白さ（面としての白さ）を強調するものとして表現していることがわかる。佐藤論文では「万葉集では『白雪』と『雪』との間に表現上の差異は認めにくい」とされているが、右のような差異を有すると判断される。[注8]

そもそも萬葉集の「積雪」表現自体が、萬葉後期の用例に集中しているのである。この時期、「白雪」以外で、雪に対して「降り積む」（左掲用例16）・「降り置く」（用例17～22）・「降り覆ふ」（用例23～24）といった「積雪」に関する動詞表現が活発に展開している点が留意される。[注9]

（16）　鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重に積めこそ我が立ちかてね（⑲四二三四　大伴家持）

（7）白雪の降り敷く山を越え行かむ君をぞもとな息の緒に思ふ（⑲四二八一　大伴家持）
（8）吉隠の野木に降り覆ふ白雪のいちしろくしも恋ひむ我れかも（⑩二三三九　作者未詳）
（9）大宮の内にも外にも光るまで降らす白雪見れど飽かぬかも（⑰三九二六　大伴家持）
（10）梅の花咲き散り過ぎぬしかすがに白雪庭に降りしきりつつ（⑩一八三四　作者未詳）

萬葉集の雪の白さは、まず「白雪」という熟語で表現されていることがわかる。この「白雪」という語句については、佐藤武義氏により、漢詩や仏典との関わりが指摘されている（「歌語としての万葉語『白雪』について」『文芸研究78』一九七五年一月　日本文芸研究会）。確かに、佐藤論文にあるように、「雪」単独の例（一一一例）は巻による偏りがないのに対し、「白雪」の使用例は後期萬葉からのものであり、漢籍の「白雪」の影響の可能性は高い。

ただし、萬葉集での用いられ方をみてみると、漢籍の「白雪」とは異なっているのではないかと考えられるのである。萬葉集の「白雪」では「積雪」を表す「（降り）置く」（＝用例4・5）、「敷く」（＝6・7）、「（降り）覆う」（＝8）、「内にも外にも光るまで降れる」（＝9　題詞に「白雪多零積地數寸也」とあることからも「積雪」であることが裏付けられる）など「積雪」を意味する表現と共起している点に注目されるのである。つまり、萬葉集では、降り積もった雪の「面」（＝面積）が放つ白さを表現するものとして「白雪」を使用していると判断される。「白雪」を「積雪」に対して用いた可能性の高さは、古今集や後撰集などの「白雪」の用例からも確認できる。

（11）みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり（古今集　⑥三二五　坂上是則）
（12）みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ（古今集　⑥三二七　壬生忠岑）
（13）白雪のふりてつもれる山ざとはすむ人さへや思ひきゆらむ（古今集　⑥三二八　壬生忠岑）
（14）あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきものを（古今集　⑬六二一　よみ人しらず）
（15）白雪のけさはつもれる思ひかなあはでふる夜のほどもへなくに（後撰集　⑭一〇七〇　兼輔朝臣）

ではなく、異常な時の物であることを現してゐる。第二に、その異常は、興味の対象としてのものではなく、神にます不盡の山の、その測り難い威力の顕れとしての異常であつて、その意味において此の事は長歌につながるのである。」と、「ま白」の表現の重要性を指摘されている点で注目できる。しかしながら、「測り難い威力の顕れ」としてなぜ「ま白」という表現が撰ばれたのかという論理的な説明が必要だろう。そもそも和歌作品の中で、雪に対して「ま白」と表現する用例は、近世の古文辞派の萬葉集に学んだ作品以外にはほとんど確認できない。[注6] そのような特殊な表現である「ま白」が赤人富士山歌の反歌において用いられていることの意味、さらにはそれが平安時代後期以降、「白たへの」へと変化していくことの必然性について、十分に議論されていないようである。そのために、現行教科書の萬葉集歌（用例2）と新古今和歌集・小倉百人一首（用例3）との比較において、第一句「田子の浦ゆ」と「田子の浦に」、第五句「降りける」と「降りつつ」の違いについては丁寧に説明がされているが、第三句「ま白にそ」と「白たへの」の違いについては言及がなく、現場教員が説明に窮しているという事態を招いてもいる。[注7] 平成二十四年以降の小学校のすべての教科書に採用され、中学教科書や『国語総合』においても多く採用されている「名歌」として扱われている以上、国文学研究の果たすべき責任があると考える。

二　赤人の時代の「積雪」表現

萬葉集において、赤人富士山歌（用例2）のように雪を「白」によって表現する例は十一例ある。そのうちの七例が、「白雪」という熟語によるものである（左掲用例4～10傍線部参照）。

（4）高山の巌に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪（⑳四四五四　橘奈良麻呂）

（5）松蔭の浅茅の上の白雪を消たずて置かむことはかもなき（⑧一六五四　大伴坂上郎女）

（6）白雪の常敷く冬は過ぎにけらしも春霞たなびく野辺のうぐひす鳴くも（⑩一八八八　作者未詳）

萬葉集の赤人富士山歌について、『全注』『釋注』[注2]以外の諸注はいずれも、長歌（右掲用例1）の「降りける」を「降っている」と訳しているが、反歌（右掲2）においては、「降り積もっている」と「積雪」で訳出している場合と、「降っている」と「降雪」で訳出している場合とで分かれている。前者が『金子評釋』『大系』『澤瀉注釋』『集成』『全注』『新大系』『釋注』『和歌大系』で、後者が『全釋』『総釋』『窪田評釋』『全註釋』『私注』『旧全集』『新全集』である。[注3]諸注の約半数が富士山頂に降り積もる白い雪のイメージで理解していることがわかる。

しかし虫麻呂の富士山歌[注4]では、長歌（③三一九）において「燃ゆる火を雪もて消ち降る雪を火もち消ちつつ」と「降雪」を歌いつつ、反歌（③三二〇）では「富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」と第一・二句で「積雪」を、第五句で「降雪」を表現し、意識的に歌い分けている。これに対し、赤人富士山歌は、長反歌いずれも「降りける」となっている。赤人が、長反歌ともに「降りける」を繰り返していることの意味を考える必要がある。

従来、駿河國風土記逸文に「富士ノ山ハ雪ノフリツモリテアルガ六月十五日ニソノ雪ノキエテ子ノ時ヨリシモニハマタフリカハルト駿河国風土記ニミエタリトイヘリ」（冷泉家本『萬葉集註釋』巻第三　三二〇番歌条）とあることや、「富士の雪は一年中降り積もっているのだから」（『全注』三一七番の解説）というイメージの固定化によって、赤人の富士山歌も当然「積雪」を歌っているものという暗黙の前提があった。しかし、当時の富士山歌では、恋心をその活火山の燃える様に喩える作品をはじめ、生活に密着した山として歌う東歌など多様な富士が詠まれており、[注5]富士の姿をどのように歌うのかについては様々な表現の可能性があったと考えられる。まずは赤人作品の表現が築き上げている富士山をみることから出発する必要があるだろう。

そして、そのことと関わって留意されるのが、赤人富士山歌の反歌「ま白」である。「ま白」に関して比較的詳細な解説をしているのは「降雪」訳の『窪田評釋』で、「第一は、『眞白にそ』によつて、その雪が、雪の季節の物

萬葉集と新古今和歌集・小倉百人一首の赤人「富士山歌」

――「ま白にそ富士の高嶺に雪は降りける」試論――

上野美穂子

一　問題の所在

今現在降っている雪（「降雪」）と積もっている雪（「積雪」）のいずれに焦点を当てて作品世界を構築しているのかによって、歌の風景は異なってくる。「降雪」か「積雪」か、あるいはその両方か。その点に関して興味深い歌い方をしているのが、赤人に関わる富士山歌（左掲1・2・3）である。(注1)

（1）天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を天の原振り放け見れば渡る日の影も隠らひ照る月の光も見えず白雲もい行きはばかり時じくそ雪は降りける語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は（③三一七「山部宿禰赤人望不尽山歌」長歌）

（2）田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける（③三一八「山部宿禰赤人望不尽山歌」反歌）

（3）たごのうらにうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪はふりつつ（新古今集⑥六七五／小倉百人一首四）